

本会元理事長 越智武臣先生を偲ぶ



歳。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は大正一二年愛媛県にお生まれになり、旧制今治中学から第三高等学校を経て、昭和二三年三月京都大学文学部史学科（西洋史学専攻）をご卒業になった。しばらく朝日新聞社に勤務されたが、半年後には大学院に入学して研究者への道を進まれ、二六年に京大文学部の助手、三一年には講師となられた。三二年夏から約一年間はブリティッシュ・カウンシルの奨学生としてイギリスに留学し、ハル大学で研鑽を積まれた。帰国後三四年に文学部助教授となられ、四四年には著書『近代英国の起源』（ミネルヴ

本会元理事長

の越智武臣先生

は、かねて入院

ご加療中のとこ

ろ、本年一月一

〇日多発性脳梗

塞のため逝去さ

れた。享年八二

ア書房、四一年刊）によって京都大学文学博士の学位を受けられた。四五年には教授に昇任して西洋史学第一講座、次いで第二講座を担任され、六二年三月停年退官して名誉教授となられた。その間本会の評議員、理事として長年、会の運営と発展に尽力され、昭和六一年度には理事長を務められた。京大退官後は京都橋女子大学文学部教授に就任され、平成八年まで勤務されが、平成元年から四年までの三年間は同大学の学長を務めておられる。

先生のご研究は、イギリス近代史を中心に、大航海時代のヨーロッパ史やイギリス現代史学など広い範囲にわたっている。その中で先生が最も力を注がれたのは、絶対王政から一七世紀の二つの革命を経て一八世紀に至る近代英国形成過程の研究である。

第二次大戦後のわが国では、イギリス史を素材として、典型的近代の理念型を抽出しようとする傾向が強かったのに対して、先生が前記のご著書で目指されたのは、「生きた一個の国民史」としての「近代英国」の成立過程を史実に即して具体的に描き出すことであった。先生は膨大な文献を渉猟しながら、近代イギリス史の展開を政治、社会経済、文化思想の三つの側面から総合的に考察して、「近代英国」のトレーガーが人文主義的教養理念に依拠する地主Ⅱジェントリー層にほかならないことを、説得的に解明された。本書の出現を機に、わが国におけるイギリス近代史像は

大きく転換をとげるに至ったといっても過言ではない。

先生はまた、イギリスの近代化の過程をすぐれて自生的、内発的なものと見なすわが国の通説に疑念を表明し、これを全ヨーロッパ的あるいは世界史的な連関の中で把握すべきことを強く主張された。このような見地から精力的に取り組まれたのが、大航海時代のヨーロッパ史に関するご研究である。先生は岩波書店刊『大航海時代叢書・第Ⅱ期』中の『イギリスの航海と植民(一・二)』(昭和五八・六〇年)の編集を担当され、リチャード・ハクルートの著作『西方植民論』を翻訳されるとともに、他の数編の史料に綿密な訳注を施し、さらにイギリスの海外進出の経緯とその社会的推進力の所在を詳述した長大な解説を執筆されたが、これらはわが国のこの分野の研究に堅固な基礎を据えたものといえる。先生のお仕事についてはほかに触れるべきことが多いが、ここではR・H・トニーをはじめ現代イギリスを代表する歴史家たちの著作のすぐれた訳業があることを記すにとどめたい。

さらに先生は、学生の教育にも並々ならぬ情熱を傾け、数多くの人材を育てられた。とりわけ感服したのは、先生が学生の適性をすばやく見抜いて、有効、適切な助言をなさっていたことである。先生はお若い頃から、学問における權威主義を排して、大家の学説に対しても忌憚のない批判を加えておられたし、学界でま

ま見られた外来の新理論になびく傾向を慨嘆してもおられた。しかしご自身の立場を他人に押しつけることはなさらず、異なる考え方の存在をも認める柔軟さと度量を持つておられた。根っからの歴史好きであられた先生の話題は、古今東西に及んでつぎることがなかったが、ご郷里である伊予の歴史について楽しそうに蘊蓄を傾けておられたお姿が今も目に浮かぶ。また先生は、様々な学会の運営や会誌の編集にたずさわられたが、特にご専門のイギリス史の分野で、出身大学の垣根を越えた研究者間の交流を活発にしようと努めておられたことが、強く記憶に残っている。

若い頃の先生は、三高時代水泳で鍛えられただけに体力には相当な自信をお持ちの様子で、ご研究も授業ぶりもエネルギーそのものであった。後年京大教授時代の先生はご健康に随分気を配っておられたが、『大航海時代叢書』の訳業に当っておられた時には、六〇というご年齢で、連日夜を徹して仕事をしていたとうかがって驚いたことがある。京大をお辞めになって後も学長職の激務に就かれ、定めしご苦労の多かったことと思う。そのためもあってか、ここ数年はご体調がすぐれず、自宅にこもりがちになられた。新たな執筆のご計画などもお話しになっていたが、それも未完のままご他界になったことは返すがえすも残念である。先生のご冥福を心よりお祈りする次第である。(服部春彦記)